

# 岡山市立公民館基本方針とSDGs

## 岡山市教育委員会事務局生涯学習部生涯学習課公民館振興室

### はじめに

岡山市は、岡山県の県庁所在地、人口約70万人の政令指定都市です。全中学校区に地区公民館が配置され37の公民館があります。それぞれの館には職員が配置され、地域住民のつといと学びの場になっています。

本市の公民館では、2000年9月の公民館検討委員会答申以来、共生のまちづくりの拠点としての公民館づくりを掲げ、2005年からは、岡山地域ESD推進協議会の一員として、ESDの視点も取り入れ、持続可能な社会と地域づくりと公民館活動を重ね合わせながら、取り組みを進めてきました。

2014年に岡山市内で開催した「ESD推進のための公民館—CLC国際会議」において参加者全員で採択した宣言「岡山コミットメント(約束)2014」は「誰もが排除されない持続可能な社会を築くため、教育の在りようを見直すときには、コミュニティに根ざした学びにこそ、要となる役割が与えられるべきである。……」という一節から始まります。このコミットメントやSDGsを自らの地域の活動に結び付けて公民館の基本方針に反映させているところです。

### 1 岡山市立公民館基本方針

「ともに わたしたちが  
未来をつくる 開かれた公民館」

2018年に岡山市内全中学校区すべてに地区公民館が設置され「生涯学習課公民館振興室」と「地区公民館」という新たな体制にな

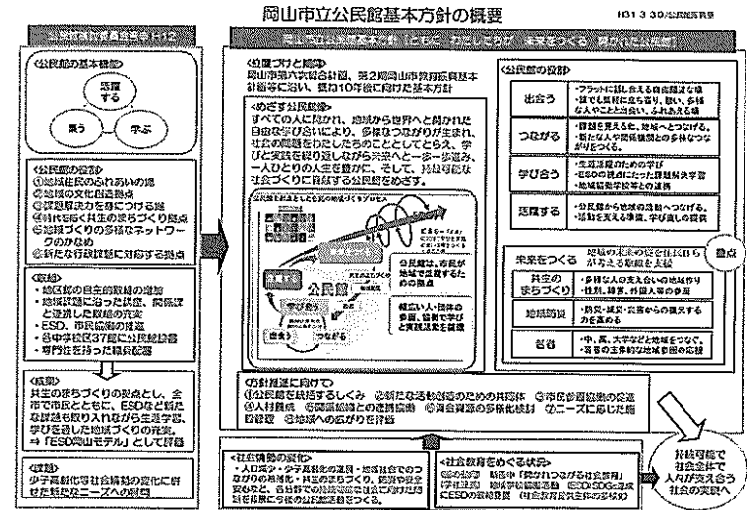
りました。体制変更に伴って、今後10年の公民館の基本的な方向性を示す「岡山市立公民館基本方針」(以下「基本方針」)を岡山市教育委員会として初めて2019年3月に策定しました。

基本方針では、今までの取り組みを土台としながら、2018年時点の岡山市の状況とこれからの社会の動向を公民館の今までの取り組みと関連させて整理したうえで、2030年に向けて公民館として重要な視点と公民館のめざす姿を示し、これからの公民館の機能と、持続可能な社会づくりに向けて岡山市の公民館が重点的に取り組む重点分野、その実現に向けて取り組むことをまとめました。

基本方針のスローガンは「ともに わたしたちが 未来をつくる 開かれた公民館」～出会う つながる 学び合う 活躍する～です。

「めざす公民館像」は、「すべての人に開かれ、地域から世界へと開かれた自由な学び合いにより、多様なつながりが生まれ、社会の問題をわたしたちのこととしてとらえ、学びと実践を繰り返しながら未来へと一歩一歩進み、一人ひとりの人生を豊かに、そして、持続可能な社会づくりに貢献する公民館をめざす」です。

めざす公民館像に基づき、重点的に取り組む分野を「未来をつくる(地域づくり支援)」「共生のまちづくりの推進」「地域の防災力づくり」「若者と地域をつなぐ」の4つの分野としました。また、従来からの「出会う、つながる、学び合う、活躍する」という公民館の役割が、常に開かれたものであるよう、新



たな視点を取り入れていくこととしています。

### 2 岡山市立公民館基本方針とSDGs

基本方針をSDGsの17分野との関連で見ると、公民館の活動全体が、まず、目標NO.4「質の高い教育をみんなに」目標NO.17「パートナーシップで目標を達成しよう」をもとにすべての目標と関連しています。本市の重点分野では「共生のまちづくり」は、目標NO.3「すべての人に健康と福祉を」、「未来をつくる(地域づくり支援)」と「防災」は目標NO.11「住み続けられるまちづくりを」、「若者の地域参画」は目標NO.10「人や国の不平等をなくそう」などの目標とつながっています。また、環境保全やジェンダー平等など問題にも取り組んでおり、それぞれの分野と関連しています。

それらの分野との関連とともに、SDGsの前提にある「だれもおきざりにされない」というスローガンや分野を包含する理念を共有し、学びや実践の活動につなげていくことが何より大切なのだと思います。

### 3 コロナ禍で生じた問題に向き合う

基本方針策定後、2019年から基本方針をもとに、各公民館で地域の現状に沿った分野の取り組みを進めるとともに、職員のワーキングチームや、市民や各種団体と職員による公民館大会などでその考え方や実践の共有をめざしています。

しかし、昨年来のコロナ禍により、集うことが制約されるなかで、本市の公民館でも主催事業の中止や利用制限を余儀なくされました。集うことを拒まざるを得ない状態は大変心苦しい状況です。

公民館の存在意義が問われます。今、どうすべきか……。基本方針で「持続可能な地域づくりに貢献する」と掲げたこともあり、通常活動はできなくとも、こういふときだからこそやらなければいけないことには取り組むという方針を改めて打ち出しました。緊急事態宣言下でも最低限の利用はできる状態とし、市民団体のフードドライブへの協力、公民館だよりやホームページによる「はなれてつながる公民館」、オンライン会議システム

の活用拡大などにそれぞれの館が取り組みました。また、関係課と連携したスマホのキャッシュレス決済講座や、複数館をオンラインで結んでのエシカル消費講座や防災ボランティア講座、学習支援など、現状に応じた取り組みを進めています。

この1年公民館の利用者は半減しました。そのことは、コミュニティの活動、人と人のつながり、学習意欲にも大きな影響を及ぼしています。公民館としては、オンラインなど新たな手段も含めて活動の場を提供し動くことで元気を取り戻す力になることが、SDGsの目標達成との関連でも重要だと考えます。

### おわりに

岡山市の公民館では、共生のまちづくりの拠点としての取り組みにESDの視点を取り入れ、それぞれの地域ごとに活動が続けられています。それらに今後の方向性を示すものとして基本方針を策定し、それをもとに実践に取り組んでいるところです。基本方針、SDGs、ESD推進のための公民館—CLC会議での「岡山コミットメント」……時代によって問題や課題は変わりますが、将来を展望し

て社会で大切なものは共通しています。これまでの公民館の取り組んできた地域の学びと活動の積み重ねと、今と将来に向けた目標を大切に、地域から、さまざまな人たちが学び合いながら、未来につながる取り組みを続けていきたいと思えます。

(岡山市教育委員会事務局生涯学習部  
生涯学習課公民館振興室 友延 栄一)

### 参考

- 岡山コミットメント(約束)2014  
[http://www.esd-jpnatcom.mext.go.jp/conference/20141104\\_okayama/pdf/CLC\\_jp.pdf](http://www.esd-jpnatcom.mext.go.jp/conference/20141104_okayama/pdf/CLC_jp.pdf)
- 岡山市立公民館HP  
<https://www.city.okayama.jp/0000013582.html>
- おokayama ESDなび  
<http://www.okayama-tbox.jp/esd/>
- つながる協働ひろば  
<http://www.okayama-tbox.jp/kyoudou/>
- 田中治彦・枝廣洋子・久保田崇編著『SDGsとまちづくり～持続可能な地域と学びづくり～』(学文社)
- 佐藤真久・岡正雄・川北秀人編著『SDGs時代のパートナーシップ～成熟したシェア社会における力を持ち寄る協働へ』(学文社)

## 地域の将来像を話し合い、できることから取り組む

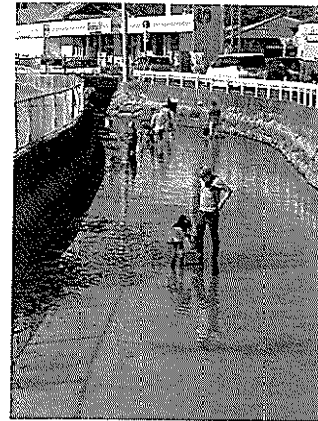
### 富山地区の概要(はじめに)

富山公民館のある地域は市の中心部から車で約30分、東西に県道西大寺線が通り、閑静な住宅地として発展してきました。北に操山、東に百間川、東西に倉安川が流れ、市街地に近いにもかかわらず春には鳥のさえずりも聞こえる自然が豊かな地域です。富山中学校区の人口は1万3,583人、6,265世帯、高齢化率は32%(2021年8月末現在)となっています。岡山市でも数少ない、1中学校区1小学校区となっている地域であり、学区内の中

学校、小学校、幼稚園、こども園等のつながりが強く、早くから地域協働学校の取り組みも実施されています。公民館は1990年に建設されており、地域の中心に位置していることもあり、地域の人たちの集い場、学びの場として活発に活用されています。

### 1 豊かな自然や「地域の宝」を次世代に引き継ごう

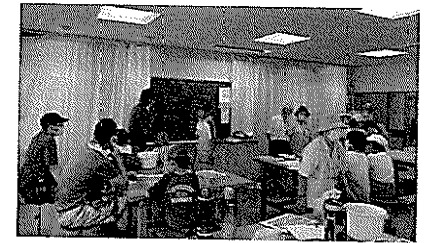
岡山市は2005年から市としてESD(持続可能な開発のための教育)を推進し、公民館ではESDを事業の柱に据えてきました。富山公



倉安川の生き物調査

民館でも、次世代に地域の豊かな自然を伝え残していこうと主催事業として「水とみどりプロジェクト」を実施しています。里山の自然に親しみ保全していこうとする主催講座を受講したメンバーにより「富山の自然を楽しむ会」が発足し、「富山の自然を楽しむ会」と共催して活動を行っています。倉安川の水質調査、生き物調査、源流探訪、川沿いウォーキングなどで川の現状を知り、その結果から具体的な活動として川の清掃を始めました。清掃で集められたゴミは分別し、内容を記録して経年変化を見えています。年に3回の清掃活動は、地域内の各種団体に呼びかけ、小学生や中学生を含む毎回50人前後の参加があります。

また、地域にある史跡や史実、人物、自然など地域の「宝」を子どもたちや新しく移り住んできた人々、次世代に伝えていくために公民館ビデオクラブのメンバーがビデオで撮影、編集し、作品をつくり続けてきました。その数は16本になります。地域内の学校に配布し、公民館でも各種団体や個人へ貸し出しを行い、「地域の宝」を知る教材として活用されています。



倉安川の生き物調査の報告会

### 2 社会のさまざまな問題を自分ごととして

ESDを推進していくなかで環境問題への関心も高まり、公民館を拠点に活動する「とみやまエコクラブ」が発足しました。環境問題だけでなく地球規模の問題をより身近な問題としてとらえていこうと、「とみやまエコクラブ」のほかにも、富山学区婦人会と共催して「富山ESDにここカフェ」(以下「ESDカフェ」)を2017年度より実施しています。ESDの理念をもとに持続可能な社会をめざして地域内のいろいろな人が学びつながり、今を生きる私たちのみならず、未来の子孫や世界の人々が「にここ」笑顔あふれる地域や社会をつくっていくための学びの場です。企画委員会で取り上げるテーマを議論し、食品ロス削減、多文化共生、子どもの貧困、フェアトレードなどについて学ぶ機会をつくっています。参加者がさまざまな社会の問題を自分ごとにしていくための工夫として、話題提供者からの話を聞きっぱなしにせず、後半はグループに分かれて、その話の感想や自分として地域としてできることを用紙に各自が書き、グループ内で話し合った後、全体でも共有していくというスタイルをとっているのが特徴です。

食品ロス削減については学んだことを実践に移していくために、家庭で眠っている食品を持ち寄り福祉団体や施設に寄付する「フードドライブ」活動に取り組みはじめました。



富山ESDにここカフェ

公民館だよりで各家庭に呼びかけ、集まった食品を地域内の福祉施設や近隣の子ども食堂に寄付しています。地域からは家庭菜園でつくっている野菜を寄付したいという申し出もあり、「もったいない」から「ありがとう」への輪が広がっています。またこれまでの活動のさらなる精選、拡大をめざして今年度から地域の新たな福祉的支援を担うNPO法人と協働した活動を模索しています。

### 3 SDGsの実現を足元からめざそう

岡山市立公民館基本方針が2019年3月に策定され、SDGsの実現をめざしていくことがその根拠として位置づけられており、「ESDカフェ」でもSDGsについてその背景や内容、どうすれば達成できるのかについて学んでいます。2021年9月には、SDGsカードゲームを活用した会を持ちました。講師からこのままでは持続不可能な世界になること、改めて「SDGsとは何か」を学び、「この世界を持続可能なものにするためには行動と発想力が大切であり、SDGsカードゲームを体験することでそのヒントにしよう」という話があった後、数人のグループに分かれてSDGsカードゲームを体験しました。

最初は自分の意見を出すことをためらっていた人も、講師からの「実現できるかどうかは別として、とにかくアイデアを出すことが大事」という一言に励まされ、どんどんと楽しく面白いアイデアが出てきました。最後に

各グループからどんなストーリーができたかを発表する時間では、笑顔とともに感嘆の声も上がり、むずかしい課題もみんなでアイデアを出し合えば、解決するのは不可能ではない、ということに気づくことができました。

終了後、参加者から寄せられた感想として「SDGsはむずかしいという人が多いが、目標達成のためできることは身近にたくさんある。今日のゲームはこのことに気づかせてくれた」「カードゲームが面白かった。発想力が貧困であることがわかった。地球規模のことから家庭の身近なことまで考えさせられた時間だった」等、ともすれば速く感じられる世界規模の課題を自分たちの身近なこととして感じることができました。

### 4 「とみやま未来塾 ～気候変動の地元学から ESD / SDGsへ～」

そうした公民館での学びや、学びから発展して活動するグループが生まれている動きと並行しながら、地域では2011年から地域の諸団体による「富山学区安全・安心ネットワーク」が構築され、まちづくりが進められてきました。「富山学区安全・安心ネットワーク」の中核を担う「小地域ケア会議」が2017年度に全戸アンケートを実施し、その分析検討から第一次地域福祉活動計画が策定されました。その策定過程において「①地域活動の後継者の育成が急務、②地域での数々の取り組みの横の連携が脆弱、③地域の未来ビジョンが共有化されていない」という地域課題が明らかとなりました。

「③未来ビジョンが共有化されていない」という点に着目し地域の未来ビジョンを描くために共有化される理念としてESD、SDGsによること、学ぶことが①後継者の育成、②地域活動の横の連携につながっていくことをめざして、公民館主催講座として「とみやま未来塾」を実施することとなりました。公民館としては、地域の老若男女の方々が多

く影響を受けている現在の異常気象への危機感をきっかけとして、ESD、SDGsの理念を理解し受け入れてもらいたいという方向性を定め、環境政策を専門とされていた山陽学園大学の白井信雄教授による「気候変動の地元学」の導入をめざしました。約半年間にわたって準備を進め2020年度から2021年度にかけて全7回のプログラムを実施しました。内容は「なぜ今、気候変動の地元学なのか」に始まり、「脱炭素社会の実現（緩和編）」「気候変動適応社会の実現（適応編）」「緩和と適応をふまえたどんな社会をめざすのか」「ライフスタイルの姿容と再構築をめざす」という構成となりました。

地域の各団体に次世代を担う人たちの参加を呼びかけたところ、約40名の参加者は男女の割合もほぼ半々、約3割が現役世代を含む30代～50代の方々となりました。相手の意見を否定せず、大胆な発想をという議論の原則に基づくワールドカフェ方式によるディスカッションを行い、参加した方々からは「今の気候変動に強い危機意識が持てた」「地域の未来を話し合うことが楽しく興味が持てた」「世代を問わずコミュニケーションをとることが大切なことがわかった」など、前向きで熱い思いが伝わる感想が毎回多数寄せられました。講座をとおして地域のビジョンを語り合い、一人ひとりがどのようなライフスタイルをめざしていくかを発表しました。2021年8月の最終回には、地元の中学生を対象に未来塾に参加した大人たちや大学生も入り、自らの人生や地域のことについて語り合うワークショップを開催しました。

### 5 みんなで取り組む 「とみやまSDGs作戦」

そうしたさまざまな活動や動きのなかで、「富山学区安全・安心ネットワーク」では2020年度の総会において活動計画に「SDGsへの取り組み」を採択し、現在は地域を挙げて「とみやまSDGs作戦」に取り組んでい



百間川の清掃活動

ます。SDGsのなかでも特に目標NO.13「気候変動に具体的な対策を」、目標NO.14「海の豊かさを守ろう」を重点として掲げています。具体的な活動としては、それまでは「富山の自然を楽しむ会」と公民館が共催して行っていた川の清掃活動を全面的にバックアップすることとなりました。2021年3月の百間川河川敷清掃では、以前より参加者が大幅に増加し100名を超える参加があり、合計144.5kgものごみを拾いました。2021年4月には「富山学区SDGsニュース第1号」を発行し、全世帯に配布されました。ニュースでは、具体的な行動として、食品ロスの削減、生ごみのたい肥利用の推進、ごみの分別の徹底化、ポイ捨て・不法投棄厳禁などにより、温暖化防止、CO<sub>2</sub>の削減、プラスチックごみの瀬戸内海への流入防止、を呼びかけています。「富山学区第2次まちづくり計画」のなかでも「とみやまSDGs作戦」が掲げられています。

このように富山地域では、まちづくり計画のなかにSDGsの達成が位置づけられ、身近な暮らしのなかで個人として地域としてできることに積極的に取り組んでいます。持続可能で包摂的なまちづくりを進めていくために、公民館は多様な人々による学び合いや語り合いを進め、地域協働の拠点としてその役割を果たしていきたいと思

(岡山市教育委員会事務局生涯学習部

生涯学習課公民館振興室 田中 純子)



ごみ拾いをしながら行ったハロウィン・プロギング  
い。

地域内でも、この問題が共有され、令和3年10月30日(土)には「ハロウィン・プロギング」を体育振興会などと一緒に開催した。仮装して走りながらごみを拾うという斬新なアイデアのイベントに、小学生を中心に総勢117名が参加した。ハロウィンにはごみを捨てるイメージが根づいていたので逆手にとった形である。10月31日(日)には、富塚町北風揚げ会主催の「とききた☆ウォークRALLY」が行われた。町内に落ちているごみを回収しながら、ウォークラリーを行うという初めての試みであった。まさに、「住み続けられるまちづくりを」、地域住民みんなが始めたのだ。

最後に、イベント開催には協力者が必要となってくる。特に、初めて開催するイベントには不安がつきまとうと思う。しかし、そこから逃げず、せっかくならば楽しんで「パートナーシップ(地域住民)で目標を達成」することを考えてみてはいかがであろうか。一緒に活動したイベントなどは、本当にやりがいや達成感が生まれる。そして、すべては「出

会い」である。一つひとつの出会いを大切にしていこう。我々のような職員は、ささいなことでも多くの住民の話に耳を傾けていくことが重要だと思う。たとえ、小さなことでも、そこからヒントが生まれ、いろいろな糸口がつかめると信じている!!



(浜松市富塚協働センター主任 野嶋 京登)

#### 〈番外編〉福島さんの詠んだうた

実は、福島さんは隠れた才能をお持ちで、うたが非常に得意です。今年行われた第36回浦郡俊成短歌大会において、なんと大賞である愛知県知事賞を受賞しました。次に紹介するのは一部ですが、ごみを拾いながら考えたうたです。みなさんも考えながらお聞きください!!

さなる子の顔に出来たるシミ幾多

取ってあげようごみ拾い  
福島さんの名刺にも掲載してある一番のお気に入りのうたである

コロナの次にゴミ禍ありワクチンは

良心とモラルの二種混合  
ごみを捨てる最良のワクチンは、良心とモラルである

子供らに美しい川と湖を

愛しき人に自慢させたい  
将来の子どもたちに、恋人へきれいで美しい佐鳴湖を見せたい

コスト減と褒めそやさされしモノたちは

流れて来ればコスト百倍  
SDGs目標12「つくる責任つかう責任」

## 論考

# 持続可能な開発のための教育： SDGsの基盤としての教育と公民館



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 元ユネスコ・グッカ事務所 大安 喜一

### はじめに

国連の主導により「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, 以下SDGs)」が採択されてから今年で5年、2030年の目標達成までの3分の1が経過しました。従来の国際的な開発目標に比べて、日本でのSDGsの認知度は高く、官民で多彩な事業や活動が展開されています。教育は目標の4番目として、1990年代から世界的に取り組みされてきた「万人のための教育(Education for All, 以下EFA)」と2000年代から先進国を中心に展開してきた「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development, 以下ESD)」を包括的にとらえ、SDGsの全目標に寄与すると考えられています<sup>1)</sup>。

ただ、日本の教育関係者の間では、SDGsはマスコミで取り上げられ知っていても、EFAやESDは、あまり聞いたことがない、という人が多いのではないのでしょうか。EFAは途上国の初等教育や識字教育などを支援する教育目標として国際協力関係者にはよく知られています。日本はESDの提唱国であり、2014年には「国連ESDの10年」最終会

合として名古屋で政府間会合、岡山でステークホルダー(関係者)会合を実施しました。さらに、文科省はユネスコスクールをESD推進拠点として位置づけ、最新の学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手」の育成をめざすことが明記されています<sup>2)</sup>。

本稿では、日本において主に学校教育で展開されてきたESDの取り組みと、公民館でのESDに関連する事例から、SDGs達成に向けた公民館の可能性を検討します。

### 1 持続可能な社会に向けての学び

持続可能な開発における教育の重要性は、2002年ヨハネスブルク・サミットにおける議論をもとに、ユネスコを主導機関として2005年から「国連ESDの10年」が始まり、その後継プログラムでは、5つの優先分野(政策、機関包括、教員、若者、地域)を定めました。さらに2019年から2030年に向けた「ESD for 2030」では、この5領域の連携を強調し現在に至っています。

日本では、文科省と環境省が中心となってESD国内実施計画が策定されています。文科省はユネスコスクールをESD推進拠点として位置づけ、「国連ESDの10年」を契機に、

それまで数十校だったユネスコスクールの加盟校が、飛躍的に増加、2021年現在、1,120校となり、世界一の数となっています。特に、大牟田市や気仙沼市のように、教育委員会の方針により市内全部の小中学校を加盟校として登録する自治体もあります<sup>3)</sup>。ユネスコスクールの特徴の一つとして、個人だけでなく学校全体でESDやSDGsに取り組む機関包括型アプローチが国内外の学校で実践されています<sup>4)</sup>。

一方、社会教育においては、ユネスコスクールのように戦略的なESD推進政策はとられてきませんでした。このため、公民館でのESDやSDGsの取り組みは、地方自治体によりさまざまです。本特集で紹介されている岡山市のように、「国連ESDの10年」から市の政策として公民館がESD推進に役割を果たしてきた自治体はありますが、全国的にはESDの知名度は低く、SDGsと関連づけて活動している公民館はあまり多くないようです。

ユネスコはESDの主導機関として、学校教育とともに学校外教育においても、先に述べた5つの領域でさまざまな事業を行ってきました。ここでは、私が所属するユネスコ・アジア文化センター（Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO, 以下ACCU）が2018年から2021年にかけて、ユネスコ・バンコク事務所と実施した「地域に根ざしたESD推進事業」での事例を紹介し、公民館とSDGsの親和性について考えます。この事業では、5番目の領域である地域をとおした持続可能な開発と学びにおける公民館などの地域学習施

設に着目しました。日本のほかにインド、フィリピン、モンゴル、ラオスが参加し、公民館やコミュニティ学習センターでの持続可能な社会に向けての学びの実践をもとに、ESD実践ガイドとしてまとめられています。

## 2 ESDやSDGsを公民館にどう取り入れるか

2018年に上記ユネスコ事業の大枠が決まり、地域でのESD実践には、SDGsを意識して「計画・行動→振り返り→共有」の過程を、参加国の地域事情に合わせて行うことになりました。ACCUは日本から参加する公民館について、①公民館の活動が盛ん、②これまでESDを直接実践していなかった、③東京から定期的に訪問できる距離にあるところ、に当てはまる候補から、全公連や公民館学会の関係者に相談のうえ、平塚市公民館で2019年度から実施することになりました。

私自身は、ユネスコ勤務時代やその後の岡山市在住の経験から、ESDやSDGsは、公民館や教育関係者にとって、すでに理解されていることと考えていました。しかし、平塚での打ち合わせを通じてESDが必ずしも浸透していないことに気がきました。持続可能な社会という理念の説明や他地域の事例紹介だけでは、自分たちの実践とどうつなげるか、ピンとこないという職員の方がほとんどで、事業の進め方を見直すことになりました。

平塚市には中央公民館と25の地区公民館が小学校区ごとに設置され、この事業には東西南北4ブロックから一つずつ、計4館が参加

しました。理念や概念の共通理解を確立してから活動するのではなく、実践しながら振り返る、という形で取り組むことにしました。新たな事業としてESDを追加するのではなく、たとえば、海岸地域の須賀公民館が夏休みに実施している山と海をつなげるキャンプに、自然とのかかわりから環境への意識を高め、経済や社会のつながり、海と山とのつながり、さらには次世代へのつながり、という持続可能な社会へ向けた多様な関係性を考える要素を加えました。SDGsの17目標を羅針盤として、振り返りと実践をくり返すESDの過程をとおして、これまでの活動に新たな意味を見だし、個人や組織、地域の変容につなげる取り組みです。平塚市では、4地区館での実践をふまえ、2021年度からESDが公民館の活動指針に言及されています。

## 3 国内外のつながり

平塚市の公民館においてESD事業を実施するなかで、2019年11月に岡山市の公民館の取り組みを実際に見て、職員の方々の意見交換を計画し、大牟田市からも教育委員会と公民館から参加いただき交流することができました。大牟田市は、学校中心で進めてきたESDを公民館とどうつなげるかという問題意識があり、異なったアプローチから持続可能な社会を考えるという共通の課題をもった交流となりました。平塚市公民館職員の方からは「岡山でESDを推進するために、特別なことをやっているのではなく、それぞれの事情から考えていく大切さを実感した」という意見があり、ESDは必ずしもマニュアル化し

て進められるとは限らず、個人や組織が主体的に考える必要性が確認されました。

2021年8月には、平塚市崇善公民館で、ユネスコ事業に参加する5か国に中国を加えて、国際交流基金とユネスコ北京事務所の助成を受けて、アジア地域の交流会合を2日間にわたって開きました<sup>5)</sup>。コロナ禍により、平塚市の公民館職員は対面で、海外の参加者と国内から岡山市と松本市の公民館関係者や水島、隠岐で地域づくりを実践している人たちはオンラインで参加いただきました。会合の内容は主に、コロナ禍での学びの継続、ESDのプロセス、若者の参画について、各国からの発表ごとにグループで議論する形で行われました。

新型コロナの感染が広がり、多くの国で学習センターの活動が休止するなか、感染予防を徹底して、屋内から屋外に移して活動を継続する事例や、オンラインやビデオを活用する取り組みが報告されました。学習を続ける大切さを参加者全員が再確認すると同時に、特に社会的弱者への配慮の必要性は、国を越えた共通の課題であると認識され、行政の生活支援だけでなく、地域でのつながりの重要性を改めて考える機会となりました。

参加国の地域性や直面する課題、かかわる人々が多様なため、ESDの進め方、またSDGs達成に向けての取り組みはさまざまです。会議の議論のなかからは、人々が社会の課題を自分ごととしてとらえ主体的に行動すること、異なった文化や伝統的な知見を大切にしながら、新しい考えや手法を取り入れること、さらに世代を越えた学び合いと、わか

りやすいメッセージによるコミュニケーションの大切さが話し合われました。

また、参加を促す動機づけを工夫するためには、負担感が少なく楽しめる活動を計画していくことや、一人ひとり自分のことを語る「ストーリーテリング」の実践も紹介されました。若者、特に学生は地域への帰属意識が希薄になりがちですが、夏冬のイベントの企画から実施まで参加することで地域の大切さを認識し、卒業して離れても、こうした経験が生かされるとの意見が内外の参加者から出ました。

## おわりに

公民館での活動がグローバルにどうつながるでしょうか。地域特性があるなかで、国内外の学習施設と交流しても、自分たちの状況とは大きく違い、活動の参考にはならないこともあります。一方で、異なった環境で行われる活動に触れることで視野が広がり、日常で見えていなかったことが見えるようになると思います。また、事情を知らない人たちに自分たちの考えや活動を言葉にして伝えることで自己の実践の再確認になるでしょう。

海外との交流には、言葉の翻訳だけでなく、意味の翻訳が必要になります。同じ単語

を使っている、異なった意味を持つことが多々あるからです。たとえば「持続可能性」「参加」「包摂」などの言葉は、日本のなかでも個人のとらえ方は微妙に異なります。

公民館でSDGsを実践する過程では、国際的な目標をそのまま受け入れるのではなく、その意味を地域特性に合わせて問い直す必要があると考えます。持続可能な社会に向けた学びの内容は、その土地に住む人々の意識と経験により異なって当然であり、さまざまな知見や経験を国内外で共有し議論することで、SDGsなどのグローバルな目標につながるでしょう。

## 注

- 1) 文部科学省 (2021) 第2期ESD国内実施計画 [https://www.mext.go.jp/unesco/001/2018/1407955\\_00010.htm](https://www.mext.go.jp/unesco/001/2018/1407955_00010.htm)
- 2) 文部科学省 (2021) 持続可能な開発のための教育 <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>
- 3) ユネスコスクール公式ウェブサイト <https://www.unesco-school.mext.go.jp>
- 4) サステイナブルスクール事業報告書 <http://www.unesco-school.mext.go.jp/wp-content/uploads/2021/materials.edu/キラリ発進！サステイナブルスクールVol.3.pdf>
- 5) ユネスコ・アジア文化センター事業ウェブサイト [https://www.accu.or.jp/program/me/esd\\_regional\\_dev/](https://www.accu.or.jp/program/me/esd_regional_dev/)

## Profile

大安 喜一 (おおよす きいち)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 教育協力部長。

文部省職員を経て、1992年から2008年11月までユネスコ・バンコク事務所にて初等教育・識字教育担当プログラムスペシャリスト。2008年11月よりユネスコ・ダッカ事務所にて教育担当プログラムスペシャリスト。2011年8月より3年間、所長代行を兼務。2016年7月より2018年6月まで岡山大学グローバル・パートナーズ教授を務め、2018年7月より現職。東京医療保健大学特任教授、岡山大学教育学研究科客員研究員。博士 (人間科学)。

## 特別寄稿

# 2030年へのステップを 踏み出したESD推進ネットワーク

ESD活動支援センター事務局次長  
川村 研治



2021年5月、日本政府は「第2期ESD国内実施計画」を策定した。そこには「ESD推進ネットワーク」等を活用し、自治体、NGO/NPO、企業、研究・教育機関等をつなぐ重層的なネットワークを強化する旨が記載された。ESD推進ネットワークは、2016年度から5年をかけて、ESD活動支援センター（全国センター）及び、8つの地方ESD活動支援センターを立ち上げ、全国に約140の地域ESD活動推進拠点を登録。ネットワークを全国に張り巡らした。そして、「第2期ESD国内実施計画」に応えるため、ESD推進ネットワークは、2030年に向けた新たなステップを踏み出した。

## 1 ESDとは？ SDGsとは？

2021年10月、ESD活動支援センター（以下「全国センター」という）は、Googleが提供する無料の分析ツール、Google Analyticsを用いて、ホームページ閲覧者の傾向を分析した。2021年4月1日～9月30日の半年間に、全国センターのホームページを閲覧した人は

3万3,836人いた。著名なユーチューバーのフォロワー数に比べたら圧倒的に見劣りするが、ESD専門機関としては健闘しているといえるかもしれない。問題は、そのうち3万3,808人が全国センターのサイトの初めての訪問者であることである。初めて全国センターのウェブサイトを訪れた人が90%に上る一方、リピーターは10%をきっている。毎年約6万人の新規閲覧者がいて、リピーターとなっていたならば、著名ユーチューバーを凌駕するフォロワー数を獲得していたかもしれない。

閲覧者のニーズを正確に把握することはできないが、ある程度の推定はできる。Google Analyticsを用いて、全国センターのウェブサイト閲覧者がどのような検索ワードを用いていたかを調べたところ、「SDGsとESD」、あるいは「SDGsと環境教育」といった検索語が上位を占めていた。「ESDや環境教育がSDGsとどう関係するのか？」という疑問を解決するために、あちこちのサイトを探している人が年間6万人程度いると推測できる。また、ページビュー（同じ人が何回も同じペ